



Title	母親の育児ストレスの変化と被養育体験との関連
Author(s)	斉藤, 早香枝; Saitoh, Sakae
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 12, 31-41
Issue Date	1999-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37645
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_31-42.pdf



原 著

母親の育児ストレスの変化と被養育体験との関連

齊藤早香枝

Transformation of Mothers' Parenting Stress and Its Relationship with Their Own Bonding Styles in Childhood

Sakae Saitoh

Abstract

This study examined (1) how mothers' parenting stress changed during their child rearing period, (2) how mothers' own bonding styles in childhood are connected with their parenting stress. 45 mothers were studied from the time when their infants were 10 months until when they were 16 months, and 28 mothers of them were further investigated at 31 months. When the infants were 10 months, using Parental Bonding Instrument (PBI), their mothers were asked to assess their own relationships with their parents. Mothers were also asked to complete a questionnaire, Parent Stress Index (PSI), when the infants were 10, 16, and 31 months. Results showed (1) that PSI scores at 10, 16, and 31 months demonstrated correlation to each other for three factors ("weak bonding", "frustration of parenting", "frustration of family support"), (2) that the PSI factor of "weak bonding" was significantly correlated with PBI. The implication of the results were discussed in connection with the concept of internal working model (IWM).

Key Words: parent stress index (PSI), parental bonding instrument (PBI), internal working model (IWM).

要 旨

子どもを育てている母親の育児ストレスが時間の経過にともなってどのように変化するか、また、母親の幼少時の自分の親との関係が、育

児ストレスにどのように関係するかについて調査した。乳児を養育中の母親45名が生後10ヶ月時と16ヶ月児の調査に参加し、そのうち28名が、31ヶ月の調査にも参加した。生後10ヶ月児に母親の親との関係を、Parental Bonding In-

北海道大学医療技術短期大学部看護学科

Department of Nursing, College of Medical Technology, Hokkaido University.

strument (PBI) を用いて調査し、育児ストレスは、Parent Stress Index (PSI) を用いて生後10, 16, 31ヶ月時に調査した。結果、育児ストレスは、それぞれの時期の間で「親役割による欲求不満」「配偶者の非協力・家族との対立」「子どもとbondの弱さ」の因子において正の相関がみられた。幼少時期の親との関係では、PBIとPSIの「子どもとbondの弱さ」の間に有為な相関がみられた。これらの結果は、愛着の内的ワーキングモデルとの関連で検討された。

キーワード：育児ストレス、内的ワーキングモデル、PSI、PBI

I はじめに

乳児をもつ母親の多くが育児不安を抱くという。これまでも母子関係研究の中で、育児不安や育児ストレスに関する実態調査やサポートシステムに焦点を当てた研究などが行われてきた^{1,2)}。しかし、ストレスの感じ方は人それぞれであることは、日頃よく経験することである。こうした個人差はいったい何に起因するのであろうか。臨床の場では、子どもの頃に受けた被養育体験が、実際に子どもをもった時の母子関係に影響するという報告が古くからなされてきた³⁾。先代の親子関係が次世代の親子関係に影響を与え、類似した親子関係が繰り返されることを『世代間伝達』と呼ぶが、近年の愛着理論では、こうした世代間伝達を説明する概念として内的ワーキングモデルが注目されてきている。これは、特定の養育者との相互作用の繰り返しの中で、子どもの中に愛着対象者からどのような反応を期待でき、また自分がどのように受容されているのかという「関係性の表象」が形成され、それが般化されて、生涯にわたって内的ワーキングモデルとして対人関係行動に作用するという考えである。内的ワーキングモデルは、無意識下で認知・情動をコントロールす

る情報処理システムとして機能するとされている^{4,5,6)}。

Mainら⁷⁾は、縦断研究の中で、愛着対象との間に安定した愛着を形成できた子どもは成長後も自分と他者とを信頼し、否定的な感情をコントロールすることに優れ、かつ困難に直面した時、他者からの援助をうまく活用する能力に長けていると報告している。この研究は、6才時まで追跡されたものであるが、ワーキングモデルは生涯にわたって作用するという愛着理論の考えに基づけば、幼少時の親との関係が同様に、成人後のストレスに対する感情やサポートの活用に影響するといえる。しかし、育児ストレスの感じ方や認識に関して、母親自身の親との関係に着目し、両者の関連を実証的に検証した研究は少ない。従って本研究は、母親の幼少時期の親との関係と育児不安に関する認識および育児ストレスとの関連を検討することを目的とするものである。

こうした過去の体験と他の因子との関連を検討する場合、因果の方向性を考慮に入れる必要がある。Sroufeら⁸⁾は、実際に子どもを養育する体験が自分の生育歴や親に対する叙述や評価に影響する可能性を指摘している。過去の親との関係を取り上げたこれまでの研究も、過去の関係の調査と他の要因の調査を同時点、あるいはレトロスペクティブに行っているものが多い⁹⁾。同時期の調査で関連が見いだされたとしても、のちに関連がなくなってしまうものでは意味をなさない。従って、本研究では、子育て中の母親の育児ストレスは、時間の経過とともにどのように変化するかを検討した上で、母親の幼少時期の親との関係と育児におけるストレスの感じ方との関連を検証する。

検討された課題は、以下の2点である。

- 1) 育児ストレスは、時間的経過の中でどのように変化するのか。
- 2) 母親自身の過去における親との関係は、育

見ストレスにどのような影響を与えるのか。

Ⅱ 方 法

1. 対象者

札幌市の保健所での4ヶ月時健診の時に母子の縦断的研究への協力を依頼し、第1子を養育中の母親45名の研究協力の同意を得た。本研究は、生後7ヶ月時の育児不安に関する聞き取り調査、生後10ヶ月時の幼少時期の親との関係に関するアンケート調査とインタビュー、生後10ヶ月、16ヶ月、31ヶ月時の育児ストレスのアンケート調査からなる。7ヶ月時45名、10ヶ月43名、16ヶ月45名、31ヶ月時は28名の参加であった。今回は、そのうち生後10ヶ月時の自分の親との関係のアンケート調査と3回の育児ストレス調査のデータを分析し報告する。

45名の対象者の属性は、表1に示したとおりである。母親の年齢は平均29.7歳で、98%が核家族であった。就業している母親の数は、生後10ヶ月時2名(4%)、16ヶ月時6名(13%)で、いずれも日中の保育は保育園を利用し、家庭で主として育児に携わっているのは母親であった。また、対象児には、妊娠・分娩時においてその後の発達に問題となるような異常はなかった。

2. 手続き

1) 母親自身の親との関係の調査

(1) 調査時期

母親自身の親との関係の調査は、1回目の育児ストレス調査と同時に、1996年9月～12月に行われた。

(2) 調査道具と手続き

母親の被養育体験の調査には、Parental Bonding Instrument (PBI)¹⁰⁾の日本語訳¹¹⁾を用いた。これは、親の行動・態度から親とのきずな(bond)を評価するものである。質問項目は、12の養護項目(care factor以下CA因子と略する)と13の過保護項目(over-protection factor以下OP因子)の計25項目からなる。CA因子は、愛着、暖かさ、共感、親密さの程度を表し、OP因子は、統制、干渉、過保護、自立の阻害の程度を表している。国内におけるこれまでの研究でも信頼性と妥当性が検討されている^{11,12)}。本研究では、縦断研究のため来所してもらった際に、母親に子どもの頃の自分の父・母それぞれがどうであったかを質問紙に「全くそのとおりだ」(4点)から「全く違う」(1点)までの4件法で回答してもらった。結果は、CA因子、OP因子それぞれに集計を行った。

表1 対象者の属性

母の年齢	平均29.7歳 (22～40)
母の学歴	中卒 2.7% 高卒 37.8% 短大・専門学校卒 51.4% 大卒 8.1%
母の就労状況	生後10ヶ月時 専業主婦43名(95.6%) 有職者2名(4.4%) 生後16ヶ月時 専業主婦39名(86.7%) 有職者6名(13.3%)
配偶者の年齢	平均32.6歳 (23～45)
配偶者の学歴	高卒 43.2% 短大・専門学校卒 18.9% 大卒 35.1% 大学院卒 2.7%
家族形態	核家族44組 複合家族1組
世帯年収	250～500万 67.6% 500～750万 16.2% 750万以上 16.2%
対象児の生年月日	1995年11月～1996年2月
性別	男児 21名(46.7%) 女児 24名(53.3%)

2) 母親の育児ストレスの調査

(1) 調査時期と対象児の月齢

母親の育児ストレスの調査は、計3回行われた。育児を取り巻く状況は子どもの発達に伴って変化すると考えられるため、調査の1回目は子どもが自力での移動を獲得し、母子関係においても乳児が母親に対し選好性をはっきりと示す生後10ヶ月時、2回目は、その半年後の歩行活動の安定と愛着が形成される16ヶ月時、さらに、2回目の調査の約1年後に3回目の追加調査を行った。それぞれの調査期間は、1996年9月～12月、1997年3月～6月、1998年7月～8月である。

(2) 調査道具と手続き

Abidin¹³⁾により考案されたParenting Stress Index (PSI)の日本語版¹⁴⁾の一部を用いて調査した。子の発達段階により母親のストレスの因子構造は変わるが、生後6ヶ月から20ヶ月の子どもを持つ母親388名を対象にした藤井の研究¹⁵⁾では、“親としての自信のなさ(以下、自信と略する)”15項目、“子どもの行動特徴に関する懸念(以下、気質)”16項目、“親役割による欲求不満(以下、欲求不満)”10項目、“配偶者の非協力・家族との対立(以下、家族)”7項目、

“子どもとbondの弱さ(emotional coldness, neglect)(以下、きずなの弱さ)”6項目、“子どもとのbond(closeness, affection)(以下、きずな)”7項目というように、6因子62項目が抽出されており、本研究ではそれを採用した。「よくあてはまる」(5点)から「全くあてはまらない」(1点)の5件法で質問紙に回答してもらった。育児に関する困難や不満が高いほど得点が高くなるよう設定した。

Ⅲ 結 果

1. 母親の育児ストレスの経時的変化について

生後10、16、31ヶ月時のPSI各因子別得点の平均を質問項目数で割って比較したものが図1である。3回の調査間で平均得点に大きな差が見られた項目は、“自信”と“家族”であった。他の“気質”、“欲求不満”、“きずなの弱さ”および“きずな”では、平均得点に時期による大きな違いはみられなかった。

次にそれぞれの因子における経時的変化を検討するために、10ヶ月、16ヶ月、31ヶ月の各時期の間の相関値を算出し表示したものが表2である。10ヶ月時と16ヶ月の間では、“きずな”を除くすべての因子で高い正の相関を示した。

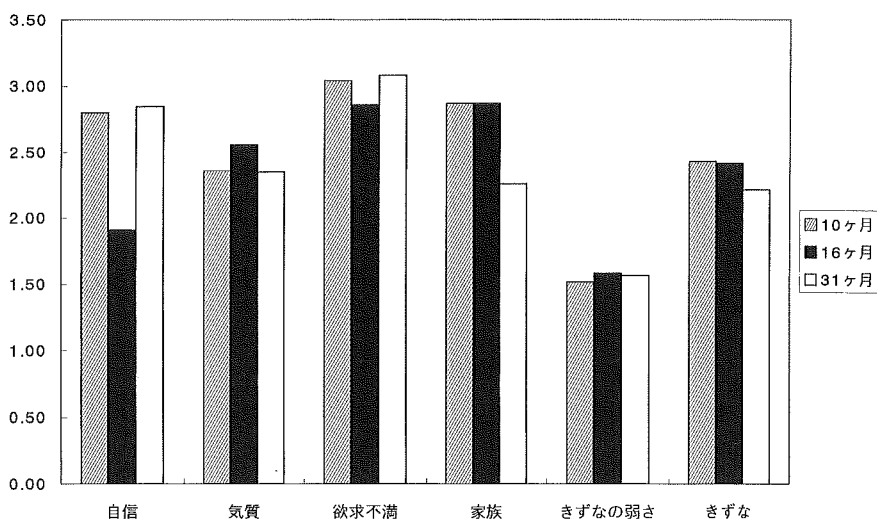


図1 生後10、16、31ヶ月時のPSI因子別平均値の比較

表2 各時期の因子別得点の相関

自信	10ヶ月	16ヶ月	31ヶ月
10ヶ月	-	-	-
16ヶ月	.465**	-	-
31ヶ月	.669*	.393 ⁺	-
気質	10ヶ月	16ヶ月	31ヶ月
10ヶ月	-	-	-
16ヶ月	.656***	-	-
31ヶ月	.296	.340	-
欲求不満	10ヶ月	16ヶ月	31ヶ月
10ヶ月	-	-	-
16ヶ月	.746***	-	-
31ヶ月	.451 ⁺	.770***	-
家族	10ヶ月	16ヶ月	31ヶ月
10ヶ月	-	-	-
16ヶ月	.616***	-	-
31ヶ月	.687***	.627**	-
きずなの弱さ	10ヶ月	16ヶ月	31ヶ月
10ヶ月	-	-	-
16ヶ月	.790***	-	-
31ヶ月	.628**	.724***	-
きずな	10ヶ月	16ヶ月	31ヶ月
10ヶ月	-	-	-
16ヶ月	.256 ⁺	-	-
31ヶ月	-.212	.358	-

+ : p < 0.1

* : p < 0.05

** : p < 0.01

*** : p < 0.001

また、“欲求不満”、“家族”および、“きずなの弱さ”の3因子では、10ヶ月と31ヶ月間、並びに16ヶ月と31ヶ月間の両方に高い正の相関が示された。すなわち、これらの因子において、生後10ヶ月時に高いストレスを感じているものは、半年後、さらに1年半の後も同様に高いストレスを感じている傾向が示唆された。

2. 母親の生育歴と育児ストレスとの関連について

表3は、母親のPBIの結果と育児ストレスの因子別得点との相関を示したものである。自分の母親のcare因子は、10ヶ月と31ヶ月時の“自

信”、10ヶ月時の“気質”、10ヶ月と31ヶ月時の“きずなの弱さ”において負の相関がみられた。また、母親のover-protection因子は、31ヶ月時の“自信”とすべての時期の“きずなの弱さ”と正の相関がみられた。すなわち、自分の母親は温かであったと思える母親（高CA因子）は、そうでない母親より“きずなの弱さ”の得点が低くなる傾向にあり、育児に対する自信のなさや子どもの行動特徴に対する懸念も少なかった。また、母親が干渉的・統制的でなかった場合（低OP）は、“きずなの弱さ”の得点が高くなる傾向があった。さらに、自分の母親だけではなく、幼少時期の父親との関係と現在のストレスの感じ方についても同じように検討したところ、父親のCA因子が高い場合、すなわち、自分の父親が温かだったとする母親も、“きずなの弱さ”の得点が低くなることが示された。

IV 考 察

時間的経過に伴って、育児ストレスはどのように変化するのであろうか。生後10、16、31ヶ月のそれぞれの時期のPSI因子別の得点の相関をみたところ10ヶ月時と16ヶ月の間では、高い正の相関がみられ、10ヶ月時に育児ストレスが高かった母親は、半年後も育児ストレスが高いことが明らかとなった。唯一この期間において、“子どもとのbond”の因子に相関が見られなかったが、質問項目一つ一つを検討した結果、「この子は誰よりも私になついている」という項目に個人個人の変化がみられていた。つまり、生後10ヶ月の時に、母親が「子どもは誰よりも自分になついている」と答えていても、半年後の調査では、違う回答をする者が多くいたことによる。これは、乳児期は母親との二者関係が中心の生活であったのに対し、1歳を過ぎると、子どもの人間関係も広がりを持つようになり、結果、母親の認識が変化したと思われる。

さらに、“親役割による欲求不満”、“配偶者の非協力・家族との対立”、および“子どもと

表3 PBI得点とPSI得点との相関値

		母親		父親	
		care因子	o-p因子	care因子	o-p因子
自信	(10M)	-.361 *	.197	-.261 +	.111
	(15M)	-.089	.214	.043	.234
	(31M)	-.490 *	.479 *	-.311	.284
気質	(10M)	-.328 *	.234	-.249	.089
	(15M)	-.179	.262 +	-.124	.276 +
	(31M)	-.422 +	.133	-.490 *	.226
欲求不満	(10M)	-.257	.094	-.157	.041
	(15M)	-.089	.214	.043	.234
	(31M)	-.018	.296	.225	.032
家族	(10M)	-.052	.157	-.069	.242
	(15M)	-.018	.156	-.070	.234
	(31M)	.005	.106	.041	.112
きずなの弱さ	(10M)	-.472 **	.424 **	-.349 *	.121
	(15M)	-.255	.396 **	-.339 *	.246
	(31M)	-.523 **	.527 *	-.583 **	.466 +
きずな	(10M)	.073	.055	.236	-.069
	(15M)	-.140	.172	-.134	.163
	(31M)	-.280	.055	-.227	.030

+ : p<.1
 * : p<.05
 ** : p<.01

のbondの弱さ”の3因子において10ヶ月時と31ヶ月時、16ヶ月時と31ヶ月時に、正の相関がみられた。すなわち、この3要因に生後10ヶ月に高いストレスを抱えている場合、その後の時期においてもストレスが高いことがある程度続いている可能性が示唆された。“親役割による欲求不満”は、主に育児に伴う拘束感や不自由さを表し、“配偶者の非協力・家族との対立”は、家族に対する不満を、また“子どもとのbondの弱さ”は、子どもと気持ちが通じていないといった感覚を表した項目からなっている。従って、これら育児に伴う拘束感や不自由さ、家族に対する不満、子どもと気持ちが通じていないといった感覚は、時間の経過があってもあまり変化せず、認識が安定していることが予想された。一方、他の育児についての自信や、子どもの行動に対する懸念の因子は、各時期間での相

関はほとんどなく、経時的変化がみられることが推測される。これは、ひとつに育児の経験を積み中で、母親が子どもとの接し方を学んでいくことによるものと思われる。また、子どもの発達に伴って、何を要求しているのかがわかりやすくなる、あるいは、自己主張がでてくる、要求を他の物でごまかすことができなくなるといった子ども自身の変化に伴う母親の認識の変化が考えられる。

母親のストレスの感じ方には、時間の経過や子どもの発達があっても変化しにくい部分があることが示唆された。今回、母親が幼少時自分の親からどのような養育を受けたかという一つ前の世代の親子関係との関連を検討した結果、変化しにくいと考えられた3つの因子のうち“子どもとのbondの弱さ”の因子と母親の幼少時の親子関係との関連を示す結果が得られ

た。この“子どもとのbondの弱さ”の因子は、子どもと気持ちが通じていない気がする、子どもは自分を嫌っている、あるいは、自分は子どもを拒否しているということを思うといった質問項目から構成されており、子どもとのネガティブな関係を示す因子といえる。つまり、「自分の親は温かく愛情があった」という認識を持っていない母親は、自分の子どもとの関係においても問題を感じやすい傾向があるようであった。では、何故母親の過去の親との関係が、現在の親子関係の認識に影響するのであろうか。

愛着理論では、幼少時期の養育者との相互作用の過程で子どもの中に自己と他者の関係性の表象が作られ、それが後の対人関係にワーキングモデルとして働き、関係性に関する注意や記憶を方向づけたり、経験の評価や解釈のルールを与えるものとして働くと考えられている^{4,6,16)}。人は、直面している事柄や他者の行為を評価・解釈することによって、その後の予想を立てながら自分の行動を決定している。この時、過去の体験に由来する記憶表象にアクセスし、過去を手引きとして現在の状況を判断しているのである。乳児の愛着に関するシグナルは、母親の潜在意識下で愛着に関する記憶を活性化させることになる。幼少期に親との間に安定した愛着関係を築くことができた母親は、防衛的にならずに表象にアクセスでき、子どもの送る困惑のシグナルにも共感的に対応でき、子どもも自由に母親に援助を求めていくことができる。しかし、安定した愛着関係を築けなかった場合、子どもの愛着のシグナルは、自分が困っているときに適切に対応してもらえなかったという不快な経験と情動を活性化させることになり、防衛的にそうしたシグナルを知覚から排除するようになることが考えられる。その結果、子どもも拒否される愛着のシグナルを表出しないようになっていくということがおこるのである^{3,5)}。むしろ、これはすべてのケースに必然

的におこることではない。過去に不幸な体験を持ちながらも安定した親子関係を築いているケースについても報告されている^{5,17)}。

今回、母親の過去の親との関係が、育児を行っていく上でのストレスの認識、特に子どもとの関係における不安において関連があることが伺えた。しかし、今回の研究は、母親の親との関係と育児ストレスという二つの関係にのみ焦点をあてたものである。育児ストレスは、これまでの研究や報告にもあるように、子どもの気質など児の側の因子やサポートシステムなど様々な要因が複合的に絡み合っているものといえ、その意味で、本研究が限定的であることは否めない。しかし、自分の親との関係に問題を持つケースの場合、育児ストレスが高くなったり、児との関係がうまく築けない可能性があることは指摘できるであろう。今回の結果は、過去が現在を規定するといった決定論的図式としてとらえるのではなく、より援助を必要とするリスクファクターとしてとらえるべきと考える。また、その場合の援助においては、育児指導や社会的サポートの整備といった従来の援助とは異なった方法が必要となることが推測される。表象の変化には治療的介入の必要性を指摘する専門家も多い^{18,19)}。本間²⁰⁾は、母親の過去のトラウマ的体験が育児不安や子どもに対するイライラ感や怒りの感情として外に表される場合があることを示唆しており、そのトラウマにアクセスすることで母親の抱える育児上の問題の解消をはかることができたケースを報告している。カウンセリングを含めた表象レベルでの介入について今後研究が進むことが臨まれる。

一方、乳児期の親子関係といえば、これまで、母親とその子どもが中心となりがちであった。しかし、今回、母親の母との関係だけではなく父親との関係も検討した結果より、幼少期の父親との関係も次世代の子育てに影響をもつ可能性が考えられ、母親のみではなく、父親や他の家族を含めた家族を視野に入れた援助が必要で

あろう。

ま と め

1) 母親の育児ストレスの中で、育児に伴う拘束感や不自由さ、家族に対する不満、子どもとの関係についての認識は、時間の経過や子どもの発達に影響を受けにくいことが示された。一方、育児についての自信のなさや子どもの行動に対する懸念は、時間の経過あるいは子どもの発達に伴い変化がみられた。

2) 子どもとの関係に対する認識は、母親自身の親との関係と一部相関がみられ、愛情ある温かな養育を受けた母親は、子どもとの関係を否定的にとらえることが少ない傾向にあった。また、幼少期の親との関係は、母親のみではなく、父親との関係も愛情あるものと関連していた。

3) 幼少期の親との関係が現在の子どもの関係の認識に影響することより、援助を考える上で、母親の過去の親との関係に着目する必要が指摘される。

4) 先代の親子関係が次世代の親子関係に関連する世代間伝達の問題は、過去の体験によって作られた表象がワーキングモデルとして作用するためと考えられることより、カウンセリングを含めた表象に介入する援助についての研究が今後の課題といえる。

謝 辞

本研究を行うにあたりご協力いただいた母子のみなさまに感謝いたします。

なお、本研究は、平成9年度及び10年度文部省科学研究費基礎研究(C)「乳幼児期の親子相互交渉における情動的コミュニケーションと愛着表象：世代間伝達仮説の検証」(研究代表者 陳 省仁)の研究対象者と同研究の資料の一部を用いております。また、平成10年度北海道大学医療技術短期大学部助成金の援助を受けて行ったものです。

〈付録資料〉

Parental Bonding Instrument(PBI)

〈“Care”の項目〉

- 1 いつも暖かく親しみのある声で話しかけてくれた。
- 2* 私が望んでいるのに十分助けてくれなかった。
- 4 私には、気持ちの上で冷たかった。
- 5 私の抱えている問題や悩みを理解してくれていたと思う
- 6 私に優しく、情愛があった。
- 11 私とあれこれ話し合うのを楽しみにしていた。
- 12 私にたえずほほえみかけてくれていた。
- 14* 私が必要としたり、望んでいることを理解しているとは思えなかった。
- 16* 自分は求められていない存在だと思い知らされた。
- 17 気分的に混乱したような時は、気持ちを落ちつかせてくれた。
- 18* 私と話し合うということはなかった。
- 24* 私をほめてくれたことがなかった。

〈“over-protection”の項目〉

- 3* 私のしたいたいのことはやらせてくれた。
- 7* ものごとを、私が自分自身で決めるのを望んでいた。
- 8 私に大人になってほしくないようだった。
- 9 私のする事は何でもコントロールしたがつた。
- 10* 私のプライバシーを無視していた。
- 13 私を子ども扱いしがちだった。
- 15* 私自身に決定を下させた。
- 19 私を、つとめて親に依存的にさせようとしていた。
- 20 私のことを親がいなければ自分のことも処理できないと思っていた。
- 21* 私の望みのままに、自由にさせてくれた。

- 22* 私が望めば、いつも外出させてくれた。
23 私には過保護だった。
25* どんな服装をしようとわたしの好きなようにさせてくれた。

(*逆転項目)

Parenting Stress Indexの一部

<1 親としての自信のなさ>

- ・自分自身、親の役割を十分はたしていないのではないかと思うことがある。
- ・子どもをいろいろしつけてきたが、だいたいうまくいっていると思う。*
- ・子どものどんな問題にでも親として対処できるか自身がない。
- ・自分は親として少し問題があるのではないかと思うことがある。
- ・子どもが何をして欲しがっているのかがつかめなくて、いらいらすることがある。
- ・やっとしつけができたと喜んでいても、ちょっとしたことですぐ逆戻りするのでっかりすることが多い。
- ・病気にかかりやすいので、しょっちゅう医者世話にならねばならない。
- ・親としてやっていくのは、予想していた以上に難しい。
- ・子どもが聞き分けがなかったり、ひどくむずがったりすると自分の育て方が悪かったのではと思ってしまう。
- ・子どもの心の動きのすみずみまでわかってやれるようになるのはとても難しい。
- ・時々子どもの将来を考えて不安になることがある。
- ・この子が成長すれば成長したで、けがをしないか、悪いことがおこらないかと、よけい心配になってくる。
- ・母親としてしつけや教育のすべてをまかされるのは、私にとって負担が大きすぎる。
- ・子どもを育てていく上で、どうしつけたらよいのかわからなくなる。

- ・この子の睡眠、食事などの日課や習慣を確立するのはとても苦勞する。

<2 子どもの行動特徴に関する懸念>

- ・よその子に比べて、泣いたりわめいたりだだをこねることが多い。
- ・この子は、何か欲しいとなると、すぐに聞き分けがなくなってしまう。
- ・かんしゃくをおこすと、なだめる方法がないほど激しくむずがることが多い。
- ・気に入らないことがあると、すぐにすねたり、しょげかえったりする。
- ・ところかまわず聞き分けをなくすので困ることが多い。
- ・いったんだだをこね始めると思い通りになるまでだだをこね続ける。
- ・泣いたり、ぐずついたりし始めると、いつまでたっても泣きやまないことが多い。
- ・ちょっとしたことで機嫌がころころと変わりやすい。
- ・よその子どもよりも、育てにくいのではないかと思うことがある。
- ・こちらの思惑で何かをさせたり、やめさせたりするのはとても難しい。
- ・迷惑をかけるに違いないから、この子を人には預けられない。
- ・よその子に比べて、落ち着きがない。
- ・親の私がまってしまうほど、この子は、ほんのしばらくの間もじっとしていない。
- ・ほかの子に比べひとつのことに注意を集中したり、興味を持ち続けるのがにがてのようである。
- ・一人遊びをさせようとしても、ほんの10分ももたない。
- ・環境や生活のちょっとした変化でも、なじませるのにとても時間がかかる。

<3 親役割による欲求不満>

- ・私の生活はほとんど子どものために費やされ

ている。

- ・子育てに追われて、自分の好きなことや新しいことにチャレンジするということがなくなった。
- ・いつも親の義務や責任にしばられていると感じる。
- ・結婚前の自分には考えられもしないほど、子どものために自分の生活を犠牲にしている。
- ・子どもがいるために自分のしたいことや習いたいことが制限されてしまった。
- ・親であることも大切だけど、自分の生活も少しは大切にしなければと焦りを感じる。
- ・子どもがいるので、趣味の会や集まりに出かけたり、友達と会ったりすることができないでいる。
- ・気分転換が上手な方だから、ストレスがたまるようなことはない。*
- ・この子の要求に、私の生活は、支配されていると思うことがある。
- ・何事につけ、以前のように夢中になれなくなった。

〈4 配偶者の非協力・家族との対立〉

- ・子どもができると、夫婦の間にも思いがけない行き違いがいろいろできてくることを経験した。
- ・子どもができたのに、夫は助けてもくれないし、手伝ってもくれない。
- ・子どもができてから私は性的関心が少なくなった。
- ・子どもはできたけれど、私の描いていたアットホームな家族像にはまだ程遠い。
- ・夫は子どものことにあまり興味がないようである。
- ・子どもができてから、夫の両親や家族との間に気詰まりな問題や意見の対立が目だってきた。
- ・子どもの育て方やしつけの方針について、私と家族の考え方にはかなり開きがある。

〈5 子どもとのbond (きずな)の弱さ (emotional coldness, neglect)〉

- ・ひょっとしたら、この子は私を嫌っているのではないかという気がする。たまにある。
- ・なかなか笑顔を見せてくれないので、てごたえがなくて、ものたりない思いをすることがある。
- ・抱きあげたり頬ずりしたりしても、気持ちが通じていないような気がする。ことがある。
- ・この子と私は、相性が悪いのではないかとと思うことがある。
- ・この子のためにいろいろ尽くしているのに、親の気持ちが通じていないのではないかと思う。
- ・心のどこかで、子どもを拒否しているのではないかとふと思う。

〈6 子どもとのbond (きずな) (closeness, affection)〉

- ・この子は、誰よりも私になついている。*
- ・私は親であることに生きがいを感じる。*
- ・私にとってこの子のいない生活などどうも考えられない。*
- ・この子はほかの誰よりも私を必要としている。*
- ・子どものためになるのなら、少々無理をしても何でもやってやりたい。*
- ・身の回りに心を許して話しあえる人が誰もいないのでひとりぼっちだという気がする。
- ・子どものためとはわかっているけど、気の進まぬことがよくある。

(* 逆転項目)

引用文献

- 1) 牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉。家庭教育研究所紀要 3：34-56, 1981.

- 2) 岩田美香：育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク。北海道大学教育学部紀要 68：191-233, 1996.
- 3) 遠藤利彦：内的作業モデルと愛着の世代間伝達。東京大学教育学部紀要 32：203-220, 1992.
- 4) ポウルビー J.：母と子のアタッチメント心の安全基地。医歯薬出版, 1993, 東京.
- 5) Main M., Goldwyn R.：Predicting rejection of her infant from mother's representation of her own experience：implications for the abused-abusing intergenerational cycle. *Child Abuse Neglect* 8: 203-217, 1984.
- 6) 久保田まり：アタッチメントの研究：内的ワーキングモデルの形成と発達。川島書店, 1995, 東京.
- 7) Main M., Cassidy J.：Categories of response to reunion with the parents at age 6: Predictable from Infant attachment classification and stable over a 1-month period. *Developmental Psychology* 24: 415-426, 1988.
- 8) Sroufe L. A.：Attachment classification from the perspective of infant-caregiver relationships and infant temperament. *Child Development* 56: 1-14, 1985.
- 9) Van IJzendoorn M. H.：Intergenerational transmission of parenting - A review of studies in nonclinical populations-. *Developmental Review* 12: 76-99, 1992.
- 10) Parker G., Tupling H., Brown L., B.：A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology* 52: 1-10, 1979.
- 11) 竹内美香, 鈴木忠治, 北村俊則：両親の養育態度に関する因子分析的研究。周産期医学 19：852-856, 1989.
- 12) 小川雅美：PBI (Parental Bonding Instrument) 日本語版の信頼性, 妥当性に関する研究。精神科治療学 6：1193-1201, 1991.
- 13) Abidin R. R.：Parenting Stress Index Manual. Pediatric Psychology Press, 1983.
- 14) 野沢みつえ：親業ストレスに関する基礎的研究。関西学院大学院研究科年報 15：35-56, 1989.
- 15) 藤井まな：Parental bondに関する基礎的研究 - 育児ストレスとの関連性 -。教育学科研究年報 20：89-103, 1994.
- 16) 遠藤利彦：愛着と表象 - 愛着研究の最近の動向 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証的研究の概観 -。心理学評論 25：201-233, 1992.
- 17) Ricks M. H.：The social transmission of parental behavior: Attachment across generations. In I Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development* 50: 211-227, 1985.
- 18) 小林隆児：摂食障害の精神病理と世代間伝達。児童青年精神医学とその近接領域 39：433-455, 1998.
- 19) スターン D. N.：乳児の対人世界 - 理論編。岩崎学術出版会, 1989, 東京
- 20) 本間博彰：育児不安と母親のトラウマ - 育児不安の背景をなすトラウマとその解消について -。児童青年精神医学とその近接領域 40：80-81, 1999.